



TITLE:

乾隆己卯--都市廣州と澳門がつくる
邊疆

AUTHOR(S):

村尾, 進

CITATION:

村尾, 進. 乾隆己卯--都市廣州と澳門がつくる邊疆. 東洋史研究 2007,
65(4): 653-686

ISSUE DATE:

2007-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/138208>

RIGHT:

乾隆己卯

——都市廣州と澳門がつくる邊疆——

村尾進

はじめに

一 康熙——遷界令の解除から

二 雍正

三 乾隆——「防範外夷規條」まで

(a) 澳門海防同知と澳門居留の公認

(b) 宣教師の摘發

(c) フリント事件と「防範外夷規條」

四 朝貢・宣教師・來航民間貿易
おわりに

はじめに

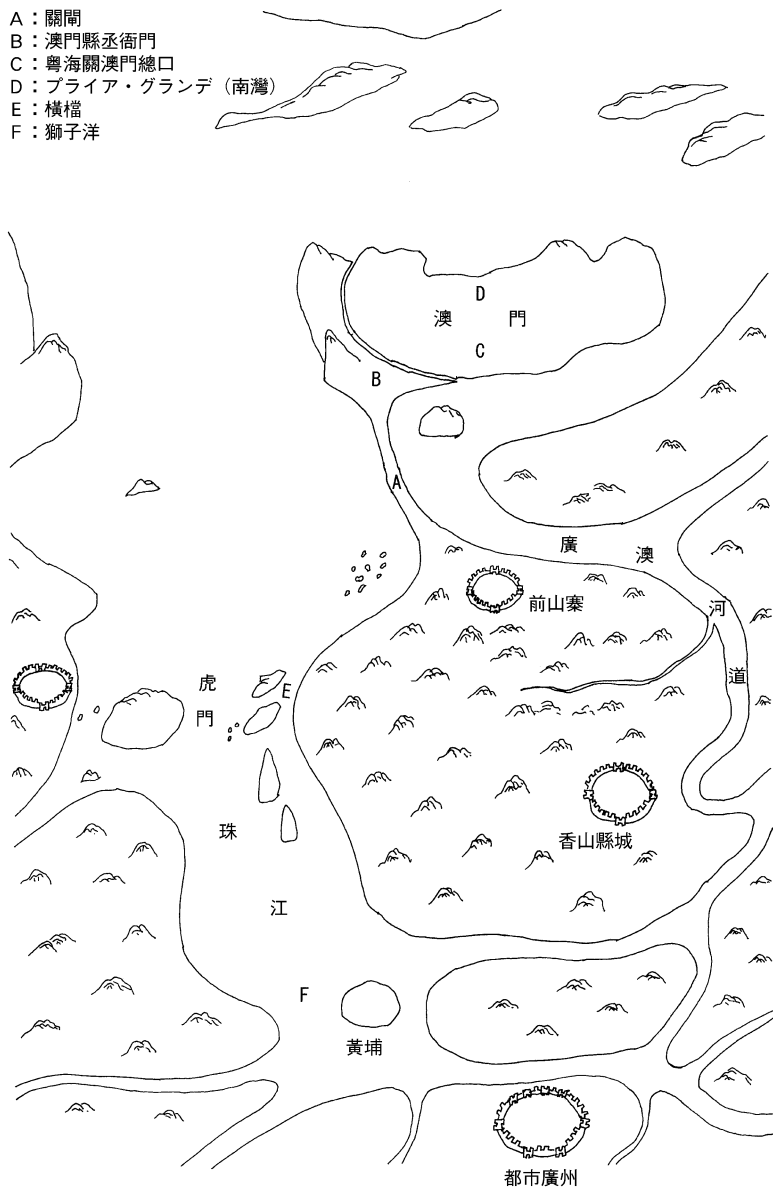
乾隆二二（一七五七）年、外國商船（ヨーロッパ各國の東インド會社船およびインドからの地方貿易船〔Country Ships〕）は來航を「廣州」一港に制限することが決定された。「カントン・システム（Canton System）」と呼ばれるこの著名な體制の形成については、日本の長崎の場合とは異なり、キリスト教とは關係がないことが特質とされ、それが敷かれた理由として（一）從來から擧げられるのが、海防上の必要性と「廣州」貿易の擁護などであった。しかし、そもそも一八世紀のはじめにす

でに外國商船は自主的に「廣州」に集中していたことを考慮すれば、數隻の商船の北上に觸發された措置としては、これはいかにも唐突で大仰な印象を受ける。この制度化は軍事・貿易という一般的問題を越えた大きな背景の存在を豫想させるのである。

清代、とりわけ康熙三三（二六八四）年以降、貨幣と商品が融通無碍に中國内外を流通していたこと、また中國東南沿海地方の民間商人が活潑に東南アジア・日本に出航し貿易を行っていたことはよく知られている。ほとんど制限されることのなかったカネ・モノ・ヒトのこのような流れにおける唯一の例外が、來航してくる人間、とりわけカトリックの宣教師と外國商人（ヨーロッパ各國の東インド會社商人およびインドからの地方貿易商人〔Country Trades〕）たちに對する目立つた規制であり、彼らが集中されたのが「廣州」であった。漠然と「廣州」といつても、ひとたびヒトという一點だけに視線を集中すれば、朝貢使節・宣教師・外國商人たちが關わっていたのが、都市廣州（以下、「廣州」と稱する）と澳門を二つの焦點とする特別な空間にほかならなかったことがただちに理解できる〔圖版參照〕⁽²⁾。朝貢・キリスト教の布教・來航民間貿易・廣州・澳門というそれぞれ長大な研究史を持つ問題群は、この限られた空間の中で一度にとらえることができる⁽³⁾のである。

この論文では、フリント（James Flint）の寧波來航によつてたまたま引き起こされたかのように見える一港集中の決定が、廣州と澳門を二つの焦點とするこの邊疆の空間を清朝がデザインしていく一連の過程——すなわち宣教師・來航民間貿易・朝貢といった對外的諸要素を、明確な意志を以てこの空間内に配置していく、半世紀にわたるプロセス——の一点一滴にほかならなかったことを述べる。五つの問題群をひとつにつなぎとめ、この空間をデザインする契機となつたのは、清朝における宣教師の排除という運動にほかならず、その意味で劃期となつたのは、一港集中が決定された乾隆二二年ではなく、「防範外夷規條」の制定によつて外國商人たちが最終的に澳門に排除された乾隆己卯の年、すなわち乾隆二四（一七五九）年だつたのである。⁽⁴⁾

- A : 關閘
 B : 澳門縣丞衙門
 C : 粵海關澳門總口
 D : プライア・グランデ (南灣)
 E : 橫檻
 F : 獅子洋



(中國第一歷史檔案館・澳門一國兩制研究中心選編『澳門歷史地圖精選』(華文出版社2000年)75頁「澳門圖說」より作成)

一 康 熙——遷界令の解除から

清初、鄭氏の海上勢力を掃討するため、順治一八（一六六一）年から遷界令が施行され、澳門のポルトガル人によるものをのぞき、民間貿易は禁止されることとなった。しかし鄭氏鎮壓後、遷界令の解除に續き、康熙二三（一六八四）年から翌年にかけて、廣州・廈門など五つの港が民間貿易のために開かれ、海關が設置されたのである。これによって外國商人たちは五港に自由に來航し、開港都市内であれば自由に行動することができるようになった。⁽⁵⁾ また、外國商人たちはその船にカトリックの宣教師たちを同乗させたから、楊光先の迫害（一六六四年）以來、窮地に立たされ、また澳門を経由する以外は國內に自由に入れなかった宣教師たちは、以後、五港を通じて國內外を自由に出入・移動し、各地に定居を作ったのである。⁽⁶⁾ 五港内では、外國商人たちは教會を訪問して宣教師たちとの關係を保ち、一方、宣教師たちの方は有能で信賴できる中國商人を紹介するなど、事情に疎い外國商人たちのためにさまざまな便宜を圖っていた。⁽⁷⁾

澳門は遷界令の適用を免除され、康熙一九（一六八〇）年には、廣州の中國商人と澳門のポルトガル商人が陸路を使って境界の關閘に赴いて行つ貿易が許可されていたが、五港開港にともない、あらたに粵海關澳門總口が設けられ、澳門のポルトガル人、マニラから澳門に來航したスペイン商人、そして廣州の公行商人が、廣州と澳門の間を定期的に往來するようになった。⁽⁸⁾ 一方、廣州における來航民間貿易については、五港開港直後の康熙二四（一六八五）年に、一連の入港の手續き——虎門から珠江に入り、商船と船員は黃埔で停泊・滞留、商品と船長・商人のみが廣州に赴く——が確立した。⁽⁹⁾ 開港後の廣州においても、外國商人たちの行動が一八世紀後半以降に見られるような制限されたものではなかったことは、一七〇三年から翌年にかけて廣州を訪れたハミルトン（Alexander Hamilton）が、廣州城内外を自由に行き來し、鎮海樓や城内の牌樓などを描寫していることからわかる。⁽¹⁰⁾ また、同じ一七〇四年に滞在したロッキヤー（Charles Lockyer）は、廣州城内外の街路の生き生きとした描寫に加えて、中國商人たちがイギリスのファクトリーに商品を携えて自由に出入り

していたこと、商品が手配されている間には、粵海關の官吏や地方官などが、楽しみにしている饗應にあずかるためにフアクトリーにやってくることを述べ、外國人と廣州の官吏・市民との間に疎隔がなく、その関係もおおむね良好なものであったことをうかがわせている。⁽¹¹⁾

廣東においても、外國商人たちに比べて、カトリックの宣教師たちはいっそう自由に往來していた。康熙三四（二六九五）年と三六六年に廣州に滞在していたカレリ（Genelli Careli）は、澳門から中國に入るため、念のため粵海關澳門總口で廣州に赴くための通行許可證を取得したが、實際は水路で廣州に入るときの検査も形式的で、小船に同乗した中國人の態度もきわめて丁寧だった、と述べている。⁽¹²⁾ 廣州到着後は、二人の中國人召使いを連れての北京旅行の期間をのぞいて（その間ずっと通行許可證なしで済ませた、とカレリは自慢している）、フランシスコ會の宣教師が郊外に所有していた教會に宿泊し、暇を見つけては内城・外城を氣ままに見學していた。新年を迎えた廣州城内外のにぎわいを活寫した箇所、總督が滞在している衙門の中にまで入り込み、巡撫以下の諸官が暇を告げる様子を觀察している部分などは、そのなかでもとりわけ精彩のある記述となっている。

當時、フランシスコ會の宣教師は、内城・郊外に教會と修道院を所有し、多くの中國人信者を抱えていた。さらに中國人信者のために、小さな教會を建てる土地を郊外に購入し、風水を亂すという理由で住民の反對に遭ったが、總督の命によって調停のための官の介入を得ることができた。また、アウグスティヌス會のスペイン人宣教師も、教會を建てるために家屋を購入していた。廣州滞在中、カレリはこれらの宣教師たちの教會を頻繁に訪問している。歸國に際しては、今度は前山寨を通る陸路で澳門と廣州を往復して準備を重ねた後、澳門の粵海關で荷物の検査を受け中國を離れた。

カレリの出國の一年半後に廣州に到着したフランス船アンフィトリト（Amphitrite）號には、康熙帝の命で歸歐し再來華したブーヴェ（Joachim Bouvet）が同乗していたため、當時の宣教師たちがもっていた力と、外國商人たちのために彼らがかつていた便宜の大きさをうかがう恰好の例となっている。⁽¹³⁾ ブーヴェは、たんなる民間商船にすぎないアンフィ

トリト號を、あたかもルイ一四世が派遣した兵船であるかのように装って特別の待遇を要求したため、民間貿易でなければ朝貢というように、截然と分かれた二つのカテゴリーしか頭にならない粵海關を困惑させたが、結局、巡撫はブーヴェの主張を容れ、ラ・ロック (La Roche) 船長以下は城内の公館に宿泊することとなった。ラ・ロックはさらに衛兵を連れ、廣州城内を通ることを許可され、⁽¹⁴⁾關税もやがて康熙帝の敕命で免除された。

フランスは當時、東インド會社の管貨人三人と書記二人、その他のフランス人六人を廣州に留めており、倉庫も所有していたが、今回、來航した管貨人たちはあらたに商館を手に入れるとともに、⁽¹⁵⁾家屋の購入を許可された。商人たちは内城・外城ともに自由に移動、觀察し、⁽¹⁶⁾黃埔に滞留していた船員たちも陸に上がることが許されていた。

アンフィトリト號の宣教師たちは、廣州到着後、教宅で康熙帝の敕諭の傳達を受け、ブーヴェは五人の宣教師を率いて上京することを命じられ、残りの者は國內布教の自由を與えられた。⁽¹⁷⁾ブーヴェの上京前、黃埔に滞留しているフランス人船員たちの病舎が盜難に遭うという事件が起こったが、ブーヴェの友人である地方官はただちに協力を約束した。またその後、病人と食糧を安置するための家を選びたいので人を遣わしてくれるようブーヴェが巡撫に依頼したところ、ブーヴェが直接出向くのであれば、その要求は問題なく聞き入れられるであろう、と地方官は回答した。結局、ブーヴェとラ・ロックは、黃埔より四分の一リーグ南にある村の寺廟を借り、病人などをそこに運び入れることにしたのである。宣教師たちの持つ力の大きさは、トゥルコッティ師 (Carlo Turcotti 都加祿) が建てさせた、當時の廣州で最も壯麗な建築物であった教會を低くするか、さもなくば壊せ、と民衆が要求したのに對して、宣教師に對する康熙帝の愛顧を理由に地方官がそれを突っぱねた、という一件からもうかがい知ることができる。⁽¹⁸⁾

五港が開かれて二〇年がたった康熙四三 (一七〇四) 年に、變化の最初の兆しが訪れた。それまで東南沿海地方の舟山・廣州、そしてとりわけ廈門に來航して交易を行っていたイギリス船が、舟山・廈門を捨てて廣州だけに入港するようになったのである。これは彼らが舟山・廈門から排除されたということではなく、この二つの都市における獨占商人の存

在と陋規の増大、港灣機能の低さなどを嫌ったイギリス商人側の自主的な選擇によるものであった。⁽¹⁹⁾以後、イギリス船は廣州のみに入港することが慣例化し、イギリス商人たちは年ごとに種々の特權を粵海關から獲得していったのである。⁽²⁰⁾

宣教師については、康熙四四（一七〇五）年、康熙帝がローマ教皇の使節トゥルノン（Charles Thomas Maillard de Tournon 多羅）と福建代牧メグロ（Charles Maigrot 顏當）を謁見してから典禮問題が本格化し、康熙四七年までに、すでに來華している宣教師の内、「利瑪竇の規矩」（適應主義的布教方法）にしたがい、永遠にヨーロッパに歸國しないことを誓う者は、康熙帝が謁見の上、印票を給付し、行動を制限されることなく引き續き各地方に留住することを許され、また新來の「西洋人」の内、技藝ある者もしくは醫者で、永遠にヨーロッパに歸國しないことを誓う者は、北京に送られることが決められた。⁽²²⁾一方、すでに來華している宣教師の内、印票を給付するかどうかはまだ未決定の者と、新來の「西洋人」で學問がなく傳教だけが目的の者は、廣州で待機させること（前者は廣州での「修行」のみが許され布教禁止、後者はしばらく廣州にとどめ他省に行かせない）、⁽²³⁾またすでに來華している宣教師の内、「利瑪竇の規矩」にしたがわぬ者については、印票を給付せず、澳門に追放されることが決定された。⁽²⁴⁾その後、宣教師たちが所持している「印票」の眞偽に對する各省からの問い合わせが續出したので、結局、給票の有無を記したリストを禮部を通じて各省に配布することになった。⁽²⁵⁾この給票の施策は必ずしも嚴密には施行されず、印票を持たない宣教師たちによる布教も密かに繼續されたであろうが、グレイゾーンとしての廣州を境に内と外を隔てるというこの處置によって、先立つ時期にきわだっていた、國境を越える宣教師たちの自由な移動はほとんど切斷されたと思われる。また、康熙五一（一七一二）年六月には廣東の地方官による澳門の視察が行われており、省城廣州に逼近し「民夷混居」していた澳門の動向に對する當時の注意ぶりをうかがうことができる。⁽²⁶⁾

宣教師に對する官僚たちの根深い反感は、康熙五六（一七一七）年の廣東碭石鎮總兵陳昂の上奏とその後のやりとりの中で、いっそうあらわになった。⁽²⁷⁾康熙五三年に廈門で起きたイギリス船アン（Ann）號事件を理由に、廣州に入港する外國商船の管理の嚴格化（入港の際の火砲の撤去、あらたに一所を設けての外國商人たちの拘束・管理、一隻ごとの入港と貿易）を主

張した陳昂は、同じ奏摺の中で、「紅毛」の不穩なる同類として宣教師の追放に言及したのである。現在の廣州は、内外に教堂があふれ、加えて同類の洋船が叢集している、互いに通じ合つて事を起こすやもしれないから、その滋蔓を防ぐべく早急に禁絶せよ、というのがその主張であつた。宣教師たちもこれに對抗して長文の嘆願書を上呈し、さらに康熙帝に謁見して直接嘆願を行った。結局、九卿會議と兵部の議覆が陳昂の上奏を支持したにもかかわらず、康熙帝の上諭は「西洋人については、數年待ち、旨を得てから禁止を行わしめよ」という齒切れが悪く、かつ曖昧なものにとどまつたのである。

以後、その末年に至るまで、印票を有している宣教師たちに對して康熙帝は寛容であり、また陳昂の上奏を受けて、印票を持たない宣教師を廣州で搜索し一箇所に集めるよう督撫に嚴命はしたけれども、澳門への追放が實際にどこまで徹底されていたかは不明である。しかし一方で康熙帝は、ローマ教皇が遣わした二人目の使節メッサバルバ (Carlo Ambrogio Mezzabarba 嘉樂) に對して、教皇令は中國の道理に大いに悖るから、天主教は中國では禁じられなくてはならないこと、傳教の「西洋人」は無用につき西洋に連れて歸らせること、技藝の人の留用および老いて病を持つ宣教師の滯留は許すが、これは自ら「修道」を行うのを許すだけで、傳教を認めているわけではないこと、などを伝えさせ、さらにキリスト教は禁止したほうが面倒が少ない、という硃批まで加えざるを得なかつたのである。⁽³¹⁾ また、外國商船が廣州で「住冬」(貿易のシーズン以外にも滯留すること)⁽³²⁾ しないよう、速やかに貿易を完了して歸國させることを、兩廣總督から洋行・通事に強くうながすことも行われていた。結局、このような曖昧さを捨て、印票の有無を問わず、宣教師という存在そのものの排除が決定的に勵行されるには、雍正時代を待たなければならなかつたのである。

二 雍正

雍正元(一七三三)年、福建省福安縣でドミニコ會宣教師の布教が摘發された。二人の宣教師が生員の家に隠れて布教

を行い、入教の監生・生員は十餘人、入教している城郷の男女は數百人にのぼる、城内外に建設された男女天主堂は一五箇所、禮拜日には數百人の男女が一堂に會している、と七月二九日の閩浙總督滿保の奏摺は報告している。³³⁾ おそらく示し合わせていた結果と思われるこの奏摺をきっかけに、宣教師たちの決定的な排除が始まった。³⁴⁾

奏摺の中で滿保は、宣教師二人はすでに例に照らして澳門に送り、天主堂は以後、書院・義學・祠堂として利用すること、入教の男女を棄教させるよう監生・生員に命じ、地方に嚴禁の告示を出したことなどを報告した後、京師に居住することを許可した「西洋人」以外は、以後各省に滞在することを許さず、京師に送るか、さもなくば澳門に追放し、各省の天主堂は別の用途に使用し再建させないよう請願した。これに對する雍正帝の硃批は、「爾のこの奏はなほだよろしい。爾のいう通りに處理せしめ、述べるところにしたがつて題本で具奏せよ」というものであった。

その後、一〇月二四日の滿保の題本に對して、雍正帝は「該部議奏せよ」と指示し、³⁵⁾ これを受けて一二月一四日に禮部の允綯が、滿保の請願をより細密にした題請を行った。曆數に精通するか技能ある者は京師に送って奉仕させるが、それ以外の者は澳門に送ること、かつて内務府が發給した印票は調査のうえ沒收し、禮部から内務府に送って廢棄すること、天主堂は公所に改めること、入教者は改宗させ、それでもなお「衆を聚めて經を誦む」者は重罪にあてること、禁令を勵行せず隱匿して報告を行わない地方官は、督撫が調査彈劾し厳しく議處を加えること、などがその内容である。これに對して一二月一七日に、各地方で騷擾が起きないように、宣教師の移送に際しては半年か數か月の猶豫を與え、官が護送するよう指示した上で、「議に依れ」という雍正帝の旨が下された。³⁶⁾

宣教師たちの澳門への驅逐というこの事態に對して、雍正二年五月、澳門とは異なり、廣州は外國商船が頻繁に來航するため、宣教師の歸國により便利であること、宣教師たちの出身國は一樣ではないから、澳門在住の西洋商人を一概に頼れるわけではないこと、宮中の宣教師たちにとって、ヨーロッパの家郷からの通信の仲介をするためにも、廣州に宣教師が滞在している必要があること、などの理由を舉げた宮中の宣教師ケゲレル (Ignatio Kogler 戴進賢) の請願があり、結局、

移送先として澳門・廣州のどちらかを宣教師に選ばせることになった。また廣州に送られた者で、老人・病人および歸國を願わない者は、外出したり布教を行ったりしないかぎり、廣州の天主堂に居住する事が許された。⁽³⁷⁾

すでに康熙四三（一七〇四）年以降、外國商船は廣州のみに入港することが慣例化していたが、この時期にあらたに宣教師たちが集中されたのを契機として、廣州と澳門を二つの焦點とするこの邊疆の空間が一體のものとして認識され、その管理に特別の關心が寄せられることとなった。澳門では人口と「洋船」の數量の調査が兩廣總督孔毓珣によって行われ、これ以上の人口流入を避けるために、あらたな「洋船」の購入の禁止（額船制度）と「西洋人」がみだりに澳門に來航・居留することの禁止が提議された。また「香山澳門圖」が描かれて御覽に呈されたのもこの時である。黃埔に停泊し廣州で交易する來航民間貿易については、乗組員たちは黃埔の船上で待機し兵丁の監視を受けることと、廣州における貿易を公平に行うことで、交易終了後すみやかに外國商船を歸國させるべきことが再確認された。虎門と澳門は省城の門戸として最も緊要であるとして、海道と砲臺の狀況が孔毓珣によって査察されたのもこの翌年のことである。⁽³⁹⁾

雍正一〇（一七三二）年七月二日、廣州において宣教師コルドス（Francisco de Cordes 方玉章）らが大規模な布教をひそかに行っているのを摘發した、と署理廣東總督鄂彌達が上奏した。新舊兩城の關廂内外に男天主堂と女天主堂がそれぞれ八箇所ずつあり、遠近の男子約一萬人、女子約二千餘百人が金錢につられ、祖宗父母の神主を踏み、十字架の前で燒きはらって入教しているというのである。これ以上處分を引き延ばせば人心風俗の憂いをなすとして鄂彌達は、廣州の宣教師はただちに澳門に送り、船を待つて秋には歸國させること、天主堂は公所とするか、あるいは住居として良民に官賣すること、澳門の「西洋人」は交易以外の目的で廣州に來てはならないし、海關監督も用のない「西洋人」が澳門から廣州に來ることを輕々に許可しない、などの施策をすでに實行しつつあると報告している。實際、この奏摺に先立つ六月二七日には、三日以内に澳門へ出立するよう宣教師たちに嚴命した、署理廣東巡撫湯永斌らとの聯銜の布告が教宅に貼り附けられ、奏摺の日附である七月二日にはすでに移動は完了していた。雍正二年の時とは異なり、宣教師たちの澳門への追放は、

今回はただちに實行に移されたのである。⁽⁴⁰⁾

またこのとき、ファクトリー自體は廣州に残したまま、外國商船の停泊地の方を廣州から遠ざけるといふ目的で、まず廣東右翼鎮總兵李維揚が、康熙五〇年以前の例にかへつて虎門の海口に外國商船を灣泊させることを上奏し、さらにこれをうけて署理廣東總督鄂彌達が、澳門の商船とともに澳門海口の拉靑角地方に停泊させ、貨物は小船で廣州のファクトリーまで搬運させることを主張したが、結局、澳門總督の壓力を受けた澳門議事會の反對決議などのために實行には至らなかった。⁽⁴¹⁾ この議論は、乾隆の初年にいたって、黃埔に滯留していた船員が誤つて郷民を殺傷したことから再燃するが、今度は鄂彌達の反對で實行されず、結局、宣教師たちに續く外國商人たちの澳門への排除は、廣州と澳門がつくる邊疆の空間に對するその後の管理のいっそうの緻密化と、乾隆一一（一七四六）年以降における全國規模の布教の發覺・摘發の二つを背景とし、フリントの寧波來航・天津控告事件を直接の契機として、乾隆二四（一七五九）年にいたってやや違つたかたちで實現されることになるのである。

三 乾

隆——「防範外夷規條」まで

(a) 澳門海防同知と澳門居留の公認

雍正八（一七三〇）年にはすでに、香山縣縣丞一名を増設して前山寨に駐劄させ、澳門の諸事を專管させていたが（いわゆる澳門縣丞）、乾隆七（一七四二）年七月には、澳門における入教の勧誘・奴僕賣買など種々の違犯の存在にもかかわらず、遠く海隅にあるために周察しがたいということを理由に、府佐一員を移駐して「澳夷」の事務を專理させ、同時に督捕・海防をも兼管させることが、廣東按察使潘思榘によって奏請された。⁽⁴²⁾ つづいて乾隆八（一七四三）年六月に起きた、アンソン（Commodore George Anson）率ゐるイギリスの兵船センチュリオン（Centurion）號が、虎門から黃埔の手前の獅

子洋まで入り、さらに鈔税の輸納を拒んで兵端が開かれそうになった事件を直接のきっかけとして、同年八月廣州將軍策楞などが、海防を專管し、また珠江をさかのぼる外國商船を査驗すると同時に、澳門そのものに對する管理を強化する目的で、まず肇慶府同知を前山寨に移駐してあらたに澳門海防同知とし、ついで舊設の澳門縣丞を關閘内の望廈に移動させることを提言し、翌九年春にはこれが實行に移された。その統屬系統は廣州知府—澳門海防同知—澳門縣丞とされ、澳門海防同知の職務は、(一) 海防の專管、(二) 出入する海船の査驗(虎門—黃埔—廣州のファクトリーという珠江をさかのぼるルートだけではなく、珠江デルタ内の内河を通じて澳門から廣州のファクトリーにいたるルートも管轄の對象であつた。また澳門から黃埔までを案内する引水、黃埔の買辦・通事なども澳門海防同知の管轄の對象となつた)、(三) 澳門の「民蕃」の管理、であり、香山・虎門兩協から抽撥された把總二員・兵丁一百名および巡視船が與えられた。一方、澳門縣丞はもっぱら澳門内の稽查を司り、「民蕃」に關わる一切の訴訟については、澳門縣丞から詳報を受けた澳門海防同知が審理することとなつた。⁽⁴⁵⁾また同九(一七四四)年には、澳門海防同知の創設をうけて、印光任による「管理澳夷章程」七條が制定され、さらに乾隆一四(一七四九)年には、ポルトガル人衛兵による中國民人殺害事件が発生したことを契機として、張汝霖・暴煜による「澳夷善後事宜」一二條が制定された。⁽⁴⁷⁾

澳門海防同知の設置後、澳門に對する管理が強化され、珠江をさかのぼる外國商船なども統一的に管理されるようになったこと、澳門を管理するための章程が二度にわたり定められたことなどをうけて、乾隆一五(一七五〇)年、澳門議事會側の一貫した抵抗にもかかわらず、廣州の外國商人たちの澳門への移動と滞在の手續きが、廣東官僚によって制度化された。⁽⁴⁸⁾その所定の手續きは『葡萄牙東波塔檔案館藏清代澳門中文檔案彙編』に收められた、乾隆一九(一七五四)年閏四月二〇日附けの文書(澳門海防同知魏紹から「澳門夷目唆嚟哆」[Procureur]あて)にうかがうことができる。⁽⁴⁹⁾

省城(廣州)の「夷商」が澳門に赴いて「探親」・貿易する件については、行商・通事から「夷商」に問い合わせをさせ、事實にもとづいて保證書を作り、粵海關に赴いて上呈する。(粵海關はそれに對して)許可證を與え、そこに

必要事項を書き連ねる。同時に（粵海關は）移文を以て海防同知に通知し、同知から澳門の「夷目」に命令して、申請内容が事實と合っていれば、當該「夷商」を「探親」先のポルトガル人に引き渡し監視させる。期限が来て事が終わったら、督促して期限通り省城に歸らせ、ほしきままに澳門に滞在させない。

澳門への移動・滞在に際しては行商・通事の保證が必要であること、澳門ではポルトガル人の住居に寄寓し、廣州のファクトリーへの歸還の期限を切られていたことがわかる。またここでいう「探親」とは、廣州のファクトリーに入ることを許可されず、澳門のポルトガル人の住居に寄寓することを餘儀なくされている妻子に會いに行くことを意味していると思われる。外國商船が澳門沖に到着すると、まず女性が同乗していないかどうか粵海關の檢閲を受け、同乗していた場合は澳門に降ろしてはじめて船は虎門から珠江に入ることができたのである。⁽⁵⁰⁾

以上の規定にもとづき、フランス人の「夷商昭呀」は、聚豐行の蔡國輝を保證人とし、「探親」のため「澳夷嘸嘸嘸」の宅内に寓居して、八月半ばには廣州に歸る、という條件のもと、澳門への移動と滞在を許可されたことが、この文書の後半部分からわかる。發行された許可證（印照）には、「夷商昭呀」という姓名に加えて、「隨帶小厮一名」「番劍一口・番小鎗四枝・番豆二十一斤・洋酒二箱」などと、同行の人物・携帯の物品が事細かに列擧された。また「夷商」の澳門到着後は、到着の日期と引受人となっているポルトガル人の保證書を、「澳門夷目啞嚟哆」から澳門海防同知に提出し檢査を受けること、歸還に際しては、「澳門夷目啞嚟哆」から「夷商」に督促して、期限通り澳門縣丞に許可證（照票）を申請し廣州に歸還させることとなっていた。⁽⁵¹⁾

この後、引き続き行われた廣東官僚と澳門側の押し合いの結果、乾隆二一（一七五七）年にいたり、澳門總督の臨席のもと、議事會は外國人の澳門への一時滞在を公許する決議を行い、ポルトガル人のインド總督の承認を得た。澳門總督・議事會の同意さえあれば、これまでポルトガル人の住居に寄寓しているにすぎなかった外國人、とりわけ各國東インド會社の管貨人に、住居を賃貸することが公式に許可されたのである。⁽⁵²⁾

(b) 宣教師の摘發

澳門に對する管理が緻密化され、外國商人たちの澳門への移動・滞在が進行していくのと平行して、各地に潜伏・布教していた宣教師の摘發が全國的に展開されつつあった。雍正元年の際と同じ福建省福安縣で、乾隆一一（二七四六）年五月、アルコベル（Juan de Alcober 費若用）・サンス（Pedro Martir Sanz 白多祿）ら五人の宣教師たちによつて密かに行われていた布教が摘發されたのがそのきっかけとなった。福建巡撫周學健の上奏には、雍正元年における宣教師の廣州・澳門追放と教會の破壊にもかかわらず、生員・監生などが順番に宣教師を自宅の地下室・隠し部屋などに匿い、そこに多數の信者が集つていたこと、信者の中には書吏・衙役も多かったから、取り締まりの情報が入ると一致協力して行方をくらましていたこと、五人の宣教師たちの省城への搬送に際しては、千人以上の士民衙役が見送りのために縣衙に集まり、頭を抱いて痛哭する者、衣服・金錢を贈る者など、身をなげうつて邪教を崇奉し、まことに王法をおそれぬ有様であつたことなどが報告されている。アルコベルの當初の自供では、同縣には現在三、四百人の信者がいるとのことであつたが、その後の取り調べの結果、入教の男女は實は二千人以上で、信仰していない者の方がむしろ少ない、ということが判明した。⁽⁵³⁾これらの報告に對して乾隆帝は六月二六日附けの上諭で、「甚だ風俗の害を爲す」として、各省の督撫に悉皆調査と布教者の逮捕・處分、宣教師については廣東に送り期限を切つて乗船・歸國させることを命じた。⁽⁵⁴⁾その結果、翌一二年には兩江地方においても、澳門から潛入した宣教師エンリケス（Antonio José Henriques 王安多尼）・アテミス（Tristano di Attemis 談方濟各）らが摘發され、⁽⁵⁵⁾さらに乾隆一九（二七五四）年には、同じ兩江地方において、やはり澳門から内地に入ったアラウヂョ（José de Araujo 張若瑟）・ヴィエガス（Manuel de Viegas 劉馬諾）らによる布教を摘發、宣教師たちのために盡力した中國人信者の汪欽一・鄒漢三・尤元常・周懷明などが、すでに乾隆一一年に一度摘發され杖責を受けたことのある者たちだということも判明したのである。⁽⁵⁶⁾

乾隆一一年六月二十六日の上諭を承けた、布教の有無の調査と摘發を報告する各省督撫の上奏と、逮捕された宣教師たちの處刑もしくは澳門への追放は、ほとんど一〇年間にわたって繼續する。この過程の中でまず目を引くのが、布教の中繼地・根據地としての澳門に對する清朝側の再認識と警戒である。たとえば乾隆一九年の江南における摘發事件では、「澳門天主堂會長季類斯」が禁令を明知しながら、あえて中國人信者の帶同のもと宣教師を澳門から内地に送り込んでいたことが、アラウヂョなどへの尋問から明らかとなり、兩江總督鄂容安は廣東の督撫に善後策を講じさせるよう乾隆帝に請願している。⁽⁵⁷⁾

また澳門は、宣教師だけでなく、布教のための資金を内地に送り込むための中繼地・根據地でもあった。乾隆一一年五月二八日の福建巡撫周學健の上奏には、本國から毎年澳門に送られてくる資金は、雇われた中國人によつて密かに各省に配給されていること、逮捕されたサンスは毎年一五〇兩、アルコベルは一〇〇兩を支給され、當初、彼らは入教する中國人に一人あたり「番錢一圓」を渡していたこと、國王からのこの資金援助のおかげで、宣教師たちの生活には餘裕があり、危険と困難を顧みず、また豊富な資金を惜しみなく使つて布教に邁進できること、などが述べられている。また九月十二日の上奏では、毎年澳門に資金を受け取りに行くために雇われている中國人繆上禹およびサンスの供述として、澳門には布教と資金供給を管轄する八堂があり、マニラ經由で運ばれてきた資金をそれぞれの堂が擔當の省に配給している、とも報告されている。各省から來た者が資金を受領する際には、信仰の進んだ者の洗禮名を記した名簿と引き替えということになっていた。⁽⁵⁸⁾

いまひとつこの一〇年間にわたる摘發の過程の中で際だっているのが、内地の民人が外國人と消息を通じることに對する乾隆帝の深い猜疑である。このことは乾隆一二（二七四七）年一〇月に起きた事件——廈門に來航したルソン船の商人が、ファクトリー（紅毛樓）の稽查にあたつていた關弁から福安縣の事件のことを聞き出そうとし、また處刑された宣教師サンスの遺體を回收しようとした——に最もよくうかがうことができる。福建將軍新柱から報告を受けた乾隆帝はこれ

に對し、内地の民人がルソン船に情報を漏らしたにちがいないとして、外國商船が來往する地方に對するいつそのの査察を閩浙總督喀爾吉善などに命じたのである。その結果、雍正十一年に宣教師を匿っていたかどで摘發されながら、現在もひそかに信仰を續け、さらにその二人の息子もキリスト教徒が集中するルソンで現に貿易に従事しているとして、漳州府龍溪縣の武生嚴登に、ルソン船から發せられた書信を受け取っていた、という嫌疑がかけられることとなった。その後、家宅捜査と尋問の結果、ルソン船と密かに消息を通じたという事實は認められないとしながらも、キリストの像や禮拜の日期を記した書冊が自宅から押收され、またその子姪女婿などが現在ルソンと福建の間を往來しているのは、なお信仰を捨てていない證左にはかならないとして、結局、嚴登は邊外に發して民とされることが決定したのである。⁽⁵⁹⁾

(c) フリント事件と「防範外夷規條」

このように布教をめぐる緊張が一〇年間にわたって繼續し、その中繼地・根據地としての澳門と、内地の民人と外國人との往來が強く懸念されていたときに、フリントの寧波來航事件が起こった。乾隆一〇（一七五五年）年三月二十四日に澳門を出航した二三號額船が中國側によつてはじめて確認されたのは、四月二三日、同船が定海に收泊したときである。定海鎮標右營遊擊鄭謝天の上奏によれば、この船にはフリントを含んだ商人・水夫など計五八名が乗船し、イギリスがかつて貿易を行っていた寧波に赴いて湖糸・茶葉を買い付けたいといっているのだ、一部の者をすでに寧波に護送し安置したとのことであつた。⁽⁶⁰⁾この報告に對して乾隆帝がまず注目したのは、辮髪をしていない乗組員の中に内地の廣東人がいるのではないか、澳門在住の中國人の間に蓄髮の風が出てきているのではないのか、という點であつた。⁽⁶¹⁾この時點では、久しく來航の經驗がなかつた寧波に一、二の外國商船が來航したことは、とりたてて問題があるとは認識されていなかったのである。

寧波で支障なく貿易を遂行できたことをうけて、翌乾隆二二（一七五六年）年、二隻のイギリス船、東インド會社船グリ

フィン (Griffin) 號と地方貿易商人のハードウィック (Hardwick) 號がふたび來航した。フリントを乗せたグリフィン號が六月一五日、寧波に來航したという浙江提督武進陞の上奏を受けた乾隆帝は、まず七月九日に閩浙總督喀爾吉善・浙江巡撫楊廷璋あての上諭を發し、現在、寧波に收泊している同船の交易は舊例に照らして處理すること、來航する外國商船が日ごとに増えて寧波が港市化すれば、居留する者もますます増加するおそれがあるから、あらかじめ稽查・巡察の手段を講じておくこと、内地の牙行・通事などがひそかに外國商船を招致するのを禁止することなどを命じ、さらに閏九月一〇日の兩廣總督楊應琚・閩浙總督喀爾吉善あての上諭でも、寧波の港市化と西洋人居留者の増加に對する懸念を繰り返したうえで、寧波に來航した外國商船がすべて「澳門一帯」に戻るよう、粵海關の現行則例に照らして浙海關の稅額を上げよ、という具體的な指示を下したのである。⁽⁶²⁾

これに對して一二月二〇日附けの二本の奏摺において、粵海・浙海兩關の稅則を逐一比較した結果、浙海關における輸出品の「正稅」は粵海關の二倍を外國商船から徵收し、「分頭」については浙江省における商品の時價を參考にして増額の見積もりをする方針を決定した、と喀爾吉善と楊應琚が報告したところ、この奏摺中の一文——「もし粵海・浙海兩關の則例を比較して章程を改訂しなければ、道路の遠近・價格の高低の區別がなされず、やがて必ずや奸牙蠹吏が暗躍することとなります。そうなれば稅收を損なうだけでなく、外國商人にも益がありません。皇仁、經久に懷柔す、という道にもはなはだ背くこととなります。」⁽⁶⁴⁾——が乾隆帝の叱責を買うこととなった。乾隆帝はまず二年一月八日の寄信上諭において、「浙民はその俗囂しく、外國商人がそこに雜居すれば、きつとゴタゴタを起すにちがいない」「寧波も港市となれば、内地・海疆に重大な影響を及ぼすであらう」と當初からの懸念を反復したうえで、浙江の稅額を廣東より重くするのは、外國商船を自發的に廣東に歸らせるためであり、「これによつて増稅しようというわけではない。このことは先の上諭に明々白々なのに、喀爾吉善らは皆このことがわかっていない。」とたしなめた。⁽⁶⁵⁾さらに二月二日には、今度は明發上諭を發し、あらためて次のように述べたのである。

この奏摺中の「もし章程を改訂しなければ、必ずや（奸牙蠹吏が）暗躍することとなり、税收を損ない、外國商人にも益がありません」という一文は、税額改定の本意を十分理解していない。従来、外國商船はすべて廣東に入港し、粵海關によつて稽察・徴税されていた。浙江省の寧波に至る者があつても、それは偶然にすぎなかつた。近年、惡徳ブローカーがグルになつて利を漁り、寧波に來る外國商船がはなはだ多くなつた。將來、外國商船が雲集し滯留久しくすれば、もう一つの澳門となつてしまい、これは海疆の重地・民風土俗に甚大な影響を與えるであろう。このため章程を改訂し、廣東よりも（税額を）いささか重くすれば、利益がないところに外國商人は來航せず、これによつて統制をすることができるといふことであつて、増税の意圖は全くないのである。このことを督撫らに明白に知らしめよ。⁽⁶⁶⁾

乾隆帝がくどいほどに繰り返してきた寧波の港市化と外國人居留者の増加に對する懸念が、布教の中繼地・根據地として問題となつていた澳門を念頭においていること、ここにいう「民風土俗」云々がキリスト教の布教を指しているにちがいないことを、この一文から明瞭に見て取ることができる。

乾隆二二（一七五七）年六月七日、プリントが同乗したイギリス船オンスロー（Onslow）號が三たび定海に來航した。

浙江に來る理由をたずねたところ、廣州の保商に對する不満を口にし、改訂された章程を示して交易する意志の有無を尋ねたら、新章程にしたがつて交易・納税したい、というのでやむなく許可した、と浙江巡撫楊廷璋と暫署閩浙總督新柱は上奏してきた。乾隆帝はこれをうけて、喀爾吉善の死によつて新しく閩浙總督を繼ぐこととなつた楊應琚に寄信上諭を發した。將來的には粵海關の例にならひ、内務府の司員に寧台道を補授して浙海關務を督理させ、また廣東と浙江で外國商人の得る利益を等しくすれば來航先を思うがままにコントロールできるとし、これは楊廷璋の能くするところではないから、粵海關の事例を熟知している楊應琚本人が、着任後、浙海關に赴き、則例を酌定して奏聞せよ、というのがその内容であつた。⁽⁶⁷⁾

この指示に對して、閩浙總督着任直後の楊應琚は一〇月二〇日附けの二本の奏摺で報告を行った。⁽⁶⁸⁾ フリントの寧波來航をめぐっては、廣東官僚・行商と浙江官僚との間に綱引きがあったことは明白であるが、もう一つの澳門を作らせないという乾隆帝の意圖を利用することによって、外國商船の廣州一港集中の制度化へとうまく誘導していく、という巧妙な構成をこの二本の奏摺は持っていた。表向きは浙海關務と増稅の指示に對する報告——樑頭鈔銀と補稅を新たに外國商人に課し、內務府の司員に寧台道を補授して關務を督理させる——という體裁を取っているが、同時にそのような小手先の手段では問題は解決できないと感じざるを得ないように伏線が敷かれていたのである。まず、廣州の保商たちが横暴であるというフリントの訴えと楊廷璋らの指摘に對して楊應琚は、現在行商は二六家の多きに達し、次年の外國商人を確保できるように競々として交易にいそしんでいる、その證據に寧波に赴いたフリントの一隻をのぞき、他のイギリス船四隻はみな廣州で貿易している、と辯護したうえで、むしろこれは開港地を増やすことで本國から功績を認められようともくろんでいるフリントと、地形と稽查という點で廣州に劣る寧波港の問題である、と主張するのである。とりわけ後者の説明に楊應琚は熱心で、コメントを附した圖を奏摺に添え、廣州の利點——稽查と護送のための官兵が虎門から黃埔までのいたるところに配置されていること、虎門の横檔は兩脇に砲臺を備えた山がそり立ち、天然の險をなしていること、横檔から黃埔までは砂州が多く、水道を熟知していない外國商船は内地の船隻の案内を必要とするため、勝手に出入することはできず、また稽查もきわめて厳しいこと——を數え上げ、一方、これらの條件を缺く寧波港には、風聞を耳にしたイギリスをはじめとする西洋諸國の商船がやがて殺到するようになり、乾隆帝が最もおそれているもう一つの澳門の出現と「海疆の重地・民風土俗」への影響という事態に立ちいたるおそれがある、と力説したのである。また廣州の立場からいえば、外國商船が年々寧波へ移動していくにともなつて、商賣が立ち行かなくなつた行商たちも廣州を去ることが懸念された。結局、兩省の貿易をとにも認めるのは具合が悪く、從來通り廣州のみに入港させるのが永遠、絶対に弊害のないやり方である、というのが楊應琚の上奏の主旨であつた。これに對して乾隆帝は「汝の意見はまったく正しい。本來の意圖は、増

税ではなく、浙江省に來航させないというところにある。また、浙江に來航する者が多くなると、廣東の行商も利を失し、民衆の生計にも差し障りが生ずるであらう。」という硃批を加えた。楊應琚の奏摺が、外國商船の一港集中の制度化を乾隆帝に決斷させたのである。

乾隆帝は一月一〇日、署理兩廣總督李侍堯・閩浙總督楊應琚あてに二通の寄信上諭を發し、以後は廣州だけに收泊・交易を許し、寧波に赴くことは二度と許さない旨をそれぞれ外國商人に曉諭せよ、と指示した。⁽⁶⁹⁾これらの上諭の中で、一港集中を制度化する理由として乾隆帝が擧げているのは、(一) 外國商船との交易で生計を立てざるを得ない廣州の行商・民衆への配慮、(二) 海防上の問題、すなわち虎門から黃埔にいたる廣州の防備は寧波港に勝り、浙江省では外國商船が來航しなくなることで海防が安定すること、(三) 贛關・韶關など内地關の稅收の維持、などであり、これらは從來から研究者によつて繰り返し言及されてきたものである。しかしこれら三點はすべて、乾隆二年一月二〇日の楊應琚の上奏およびそれに先立つ二年一月八日の上奏の主張（およびそれを敷衍した乾隆帝の硃批）をそのまま引用したにすぎない。乾隆帝の側からいえば、浙江官僚を説得するに足る理由を提示するために、事情に通じた楊應琚の意見をたくみに採り入れ、それによつてもう一つの澳門を作らせないという當初からの意志を貫徹したということができる。フリンツの事件については、宣教師の關與は全くその氣配が見られないにもかかわらず、「寧波地方で惡德ブローカーがグルになつて（外國商人を）引き込んでゐるにちがいないから、留意して査察せよ。もしブローカーが洋行を設立していたり、あるいは天主堂設立のもくろみがあったら、みな厳しく禁止・追放せよ。そうすれば外國商人もよりどころを失ひ、來路を斷つことができるであらう。」と上諭の中で乾隆帝が言及しているのは、この決斷の奥にある眞意を的確に表現したものである。⁽⁷⁰⁾乾隆帝の指示を受けた楊應琚は、以後は廣東のみの收泊を許し、ふたたび寧波に赴くことを許さない旨をまず寧波のフリンツに曉諭し、ついでその内容を咨文にしたものに乾隆帝の上諭を添えて李侍堯に送つた。⁽⁷¹⁾李侍堯はただちに澳門海防同知・香山縣知縣などに命令して、澳門に移動しているイギリスの商人を集めて直接曉諭させるとともに、その内容

を抄録し本國に持ち歸らせた。⁽⁷²⁾

乾隆二四（一七五九）年六月二四日、四たび北上して天津に至ったフリントが、粵海關監督李永標が胥役・家人などの勒索を放任している、と訴える呈文を天津府知府靈毓に差し出した。乾隆帝は給事中朝銓・福州將軍新柱を廣州に派遣し、兩廣總督李侍堯とともに勒索の事實の調査を行わせた。その結果、李永標は家人・胥役に對する監督不行届の咎で革職、禁を犯して北上したフリントは以後三年間澳門に監禁されることとなった。⁽⁷³⁾ この事件に關して印象的であるのは、粵海關の勒索をめぐる調査と處分そのものではなく、フリントと通じて事件をそそのかし、またフリントのために呈文を代筆した内地の「奸民」の存在を乾隆帝がかたくなに信じ、その逮捕に躍起になっていることである。すでに乾隆二十一年七月、グリフィン號の寧波來航の報を受けた乾隆帝は、内地の牙行・通事などがひそかに外國商船を招致することへの注意を喚起し、また翌二二年正月には、外國商人と通じて寧波に來航させたという罪狀で、寧波でイギリス船の買辦となった廣東人の梁國宣を北京まで送るよう兩廣總督楊應琚に命じていた。⁽⁷⁴⁾ 外國人との往來を防止することが一貫して乾隆帝の最大關心事であつたことをうかがわせるが、乾隆二四年のこの控告事件との類似性という點で最も際だっているのは、一二年前のルソン船による宣教師サンスの遺體回収事件である。結局、今回の事件についても、ガラパ在住の福建人林懷なる人物に呈文を代筆してもらつたというフリントの言い分を、乾隆帝は信ずるに足りないとして徹底調査を命じ、最終的に四川人の劉亞匾なる人物が眞犯人として外國商人・保商などの立ち會いのもと廣州で處刑され、またフリントと交際があり、資金を預かつて茶葉の運送を請け負つていた婺源縣の生員汪聖儀父子も處罰されるという結末となつたのである。⁽⁷⁵⁾

フリントの寧波來航と天津控告はすべて内地の奸人の教唆と行商・通事の監督不行届に由來しているとして、すでに廣州以外に來航することが禁じられていた外國商船の商人（そして澳門の宣教師）が内地の民人と往來・接觸するのを防止するために制定されたのが「防範外夷規條」であつた。兩廣總督李侍堯によつて乾隆二四（己卯）年一〇月二五日の奏摺で提案され、同年一二月には乾隆帝によつて裁可された。⁽⁷⁶⁾ 「防範外夷規條」は以下の五條からなつてゐる。

- (一) 外國商人が廣州で「住冬」することは永遠に禁止する
 - (二) 外國人が廣州に到着したら、假寓先の行商にこれを管理・稽查させる
 - (三) 外國人から資金を借りること、および外國人が中國人を雇って役使することは禁止する
 - (四) 外國人が人を雇って音信を通じるという積弊は永遠に禁止する
 - (五) 外國商船が停泊しているところは、兵を差し向けて武力で押さえ取り締まる
- (三) において、外國人から資金を借りて運用することを禁じているのは、それによって汪聖儀父子のように外國商人と親しく往来・交際し、また劉亞區のように事件の協力者となること、さらに資金を貸し付けた外國商人が元本・利益を回収するまで歸國しようとししないこと、などを懸念しているのである。また(四)は、外國商人が「千里馬」(民間の早馬)を雇って江浙の物價状況を探らせ、澳門の宣教師から欽天監にあてた書信が内地人によって傳送されている、という近年の實態を念頭においており、(五)は外國商船の停泊地である黃埔における内地民人との往来・接觸に關する規定である。
- この五條の中で最も大きな意味を有している(一)と(二)——貿易シーズン終了後の澳門への移動(廣東官僚の壓力の結果、乾隆二三年に澳門議事會によって外國人の澳門滞在が公許されたことがこの處置の前提である)と、外國商人のファクトリー内寓居の嚴格化および行商・通事による管理の強化——はペアを成している。これまでとはベクトルが逆轉し、借りものの根據地としての澳門に滞留している外國商人たちは、貿易のシーズンになると、來航船と合流して廣州のファクトリーに赴き、ファクトリー内では行商・通事による管理のもと、ひたすら貿易のみに専念し、その後ふたたび澳門へ歸る、というスタイルに変わったのである。『葡萄牙東波塔檔案館藏清代澳門中文檔案彙編』中の地方文書の表現を使うならば、「防範外夷規條」以前は「期限が來て事が終わったら、督促して期限通り省城に歸らせ、ほしひままに澳門に滞在させない(限滿事竣、催令依限回省、勿任逗留)⁽⁷⁷⁾」であつたのが、以後は「廣州に赴いて貿易を行い、……事が終わったら外國商人を澳門に戻らせる(前往省城、料理貿易事務、……並飭令該夷商、事竣來澳)⁽⁷⁸⁾」となつたのである。廣州の附近に一段の土地を

與えられることを要求したイギリス使節マカートニー (George Macartney) に對する、一見奇妙とも思える乾隆帝の回答——「これまでずっと西洋各國の商人たちは澳門に居住して貿易を行い、居留地の境界を定め、尺寸もこれを越えることを許さなかった。廣州の行商のところに赴いて荷下ろしをする西洋商人も、みだりに省城に入ることはできなかった。これはもともと内地の民と外國人と間の争いを防ぎ、中外の境界を立てるためであった。今、省城に接近する場所を分け與えて、なんじらの國の商人を居住させるとするのは、西洋の商人は歴來澳門に居住してきたという定例にはなはだそぐわない⁽⁷⁹⁾」——はこのような文脈の中ではじめて正確に理解することができる。雍正一〇年に一度試みられた、宣教師たち⁽⁷⁹⁾に續く外國商人たちの澳門への排除は、乾隆二十四年にいたって、當初とはやや違つたかたちで實現されたのである。

四 朝貢・宣教師・來航民間貿易

雍正末年以降、外國商人たちが行動の自由を制限され、しだいに廣州から押し出されていく様子は、ファクトリーに滞在したイギリス人たちの記述からも確認することができる。康熙二三(一六八四)年以後、外國商人たちは自由に來航し、開港都市廣州の範圍内であれば自在に行動することができるようになったが、雍正末年にはすでに城内に入ることが禁止されていたことを、スウェーデン東インド會社のキャンベル (Colin Campbell 一七三二年九月から翌年一月まで廣州に滞在) の日記からうかがうことができる。ただしこの段階では、城外における行動規制や外國人に對する一般民衆の輕蔑・攻撃などはまだ認められない⁽⁸⁰⁾。その後、乾隆一二(一七四七)年から翌年にかけて廣州に滞在したノーブル (Charles Frederick Noble) の記述からは、城内でさえなければ、時には行商ティンクワ (Tingqua) の同行のもと、外國商人たちが實に自由に行動していることがわかるが、その際にまわりついて侮辱をおこなう民衆の記事も、同時に頻繁に見られるようになる⁽⁸¹⁾。乾隆二四(一七五九)年の「防範外夷規條」の成立後、澳門が外國商人たちの借りものの基地となり、廣州のファクトリーへはただ貿易のためだけに赴くという形態が成立すると、廣州における行動制限も一段と厳しくなった。乾隆三四

(一七六九)年に廣州に滞在したヒッキー(William Hickey)の回想録では、ファクトリーから出て境界を越えたとたんに住民に発見され、子供たちが追つてきて罵り、石などをおつけられたことが述べられている(その後、城内にも強行突入するのだが、やはりさんざんな目に遭っている)。また、一八五〇年代後半まで變わることのない、廣州における外國人の生活のイメージ——ファクトリー内での交易のみに行動が制限され、最初の數日をすぎると何も見るものがない退屈な都市——がこの時すでにできあがっていたこともわかる。⁽⁸²⁾一七五一(乾隆二六)年に廣州に滞在していたオスベック(Peter Osbeck)の旅行記にも、外國人に對する廣州の民衆の憎惡と輕蔑、接觸への恐怖が今と同様にうかがわれるが、ファクトリー内への閉じこめと厳しい行動の制限、貿易シーズン後の廣州からの驅逐などが顯著な現在と對比すると、今はもう失われてしまった行動の自由さが八〇年前の彼の時代にはまだ許されていたと、一八三二(道光二二)年一〇月號の『チャイニーズ・レポジトリ』(Chinese Repository)が述べているのは、「防範外夷規條」の成立をはさんだ前後の時期で、廣州における外國人の生活がいかに變わってしまったかを適切に表現したものである。⁽⁸³⁾

「防範外夷規條」⁽⁸⁴⁾によつてデザインされた廣州と澳門がつくる邊疆の空間は、(一)、一貫して澳門に居留することを餘儀なくされた宣教師、(二)、通常は澳門に居留している外國商人たちが、貿易のシーズンのみ廣州のファクトリーに移動し、來航船と合流して行かう民間貿易、⁽⁸⁵⁾(三)、廣州城外西關の地に設けられた懷遠驛に滞在している使者が、來航直後と歸國前に入城して「驗貢」と「筵宴」の儀禮にあずかるシャムの朝貢、⁽⁸⁶⁾というように對外的諸要素を配置している。朝貢の空間としての廣州と、宣教師(そして外國商人たち)が滞留する澳門、というこのような差異化は、天子の「聖化」を慕い、「中國前聖の教」を尊崇する者だけが來華を許され、宣教師たちのように「別の教名を立て、その國俗を踏襲し、その左道を持ち、民人を引き込んではその教を信奉させる」⁽⁸⁷⁾のは「向化遠來」の意に悖る、という共有された意識にその根據がある。⁽⁸⁷⁾

康熙三七(一六九八)年、廣州に到着したフランス民間商船アンフィトリト號に同乗していた宣教師ブーヴェが、ルイ

一四世が派遣した兵船を装って要求した特別の待遇に對して、粵海關が困惑しつつも「朝貢」としての特權を認めてしまったという一幕は、共有されたこの意識と空間的差異化がこの時期にはまだ顯在化していなかったことを傳えている。だが、禁教令の發布から一年あまりを経た雍正三（一七二五）年三月には、すでに狀況が變化していた。穀種・果樹などを進獻し、米穀を廣州に載運した、シャム王の派遣船長に對する欽賜品授與と旨意宣讀の儀式が執り行われた際、全國各地から廣州に追放されてきた宣教師たちと、廣州に來航していた外國商人・通事などが、わざわざ巡撫衙門に集められ、これを拜觀するよう命じられたのである。空間的な差異はまだ未分化だとしても、ともに廣州に滞在しているシャムの朝貢使節と宣教師・外國商人を明瞭に差異化しているという意識と行爲が、この時すでに顯在化していたことをこれは示している。⁽⁸⁸⁾

その後、乾隆二四年に明確な形で形成されることとなった廣州と澳門の空間的な差異化が、廣州の士大夫からは「中外の大防」と意識され、また宣教師と外國商人を澳門に排除し、朝貢の儀禮だけが展開されるようになった廣州が、天子の徳の「光（廣）被」と「中外一統」を表象した空間として明瞭に認識されるようになったことは、南京條約締結直後における廣州の士大夫の危機意識と激しい反撥の中に最も鮮明にうかがうことができる（當時、外國商人がすでに廣州のファクトリーに常駐し、キリスト教の内地布教とイギリス領事の入城が日程にのぼりつつあった）。

彼らからすれば、すでに和好し、かつ對等の關係になったのだから、街の内外を問わず、當地の人のように行き來することが許されると考えたのである。しかし、朝貢の諸國は「驗貢」の時でなければ入城することができないのである。イギリスは朝貢國とはなったけれども、二度の朝貢はいずれも天津から入ったので、いっそう參考にすべき例がない。廣州の住民は、シャムと越南の使節は必ず貢物とともに入城し、「筵宴」の時は冠服に換えて出てくるのを見慣れているので、イギリスがこれなくして入城しようとしているのを見て、「中外の大防」はここにかかると考えたのである。⁽⁸⁹⁾

わが朝の威徳はあまなく世界を被い、届かないところはない。(中略) 廣東から入港した者には、シャム・オランダ・イタリア・ポルトガル・イギリスなどの諸國があり、使節の船が至ると大吏が上奏し、天子の兪允の旨をいただく。ねぎらいのパーティーの典禮があり、官が伴送し、回賜の品は多く、貢物は少なく、恩を施すときわめて手厚い。臣は沿海地方に育ち、目にし耳にして體にしみこんでしまったものはとても書ききれものではないが、過去の書籍に徴してみれば、ちよつとした故實にも、前代(明代)に使者を遣わして(朝貢を)招致したのとは比べものにならない「一統無外の規」と「聖徳懷柔の遠」をうかがうことができるのである。⁽⁹⁰⁾

おわりに

廣州と澳門という、これまで別々にあつかわれてきた二つの港市を、朝貢の空間としての廣州と宣教師・外國商人が滞留する澳門、というひとまとまりの邊疆の空間に置き換えることで、氣づかれることのなかったいくつかの可能性が見えてくるように思われる。

廣州と澳門がつくる邊疆の基本的な骨格は、すでに雍正年間に構想されたものであった。一方、『大義覺迷錄』——漢族の知識人に對して、經書そのものの典據と論理に即し、問題を天命を享けた天子の徳の大小に收斂することによって、「華夷の辨」を否定することをねらったマニフェスト——は、清朝の天子の徳が「光被」し、「中外一統」が實現した現在、「華夷中外」を分かつことと自體が無意味である、と幾度も強調している。⁽⁹¹⁾ 雍正帝のこのような發言が東南地方の邊疆をも意識においているとするならば、天子の「聖化」を慕わず、「向化遠來」の意に悖る、と漢人讀書人たちに指彈されていた宣教師と外國商人を排除することができてはじめて、朝貢という行爲が天子の徳の「光被」と「中外一統」を十全に表象することができ、さらにそのことによって「華夷の辨」をも否定することができる、というのが、そもそもこの構想の核心ではなかったのか。乾隆二四年の「防範外夷規條」によって最終的にデザインされた廣州が、天子の徳の「光

被」と「中外一統」を表象する空間にはかならなかったということは、先に述べた南京條約締結直後における廣州の知識人の危機意識の中にも確認できることである。

一般的なイメージとは異なり、港市空間のあり方としては、廣州と澳門がつくる邊疆と近世長崎との間に大きな違いを見いだすことができ、「キリスト教排除の出口」・「雜居」から「分離」への轉換という空間形成の過程の方にむしろ共通性を見いだすことができる。さらに、江戸幕府と清朝がともにその政權確立期において、キリスト教の排除を契機とする邊疆・境界形成の過程を共有し、それぞれその過程においてイデオロギー上の「成果」を得ていたのではないか、ということは一度考えてみる必要があるように思われる。日本史においては、周知の通り、このような研究はすでに古典的なトピックであり、⁽⁹³⁾一方、清朝の方はこの過程の中で、政權の確立にあたって喫緊の課題であった「華夷の辨」を克服するという作業を行った可能性があるのである。また、たんに共通・共有していたというにとどまらず、一世紀ほど遅れた清朝がどれほど江戸幕府の禁教と出島・唐人屋敷の情報入手し、それがどれほど東南地方の邊疆の形成に影響を与えたか、ということも具體的な課題として考えられる。雍正一〇年における外國商船の澳門への移動の試みの數年前に、雍正帝と廣東官僚はともに、日本の禁教、とりわけ長崎における踏み繪の状況と嚴格な管理下におかれた唐人屋敷・出島の情報を、長崎に赴いたことのある中國商人から入手していたのである。⁽⁹⁴⁾

註

(1) 矢野仁一『アヘン戦争と香港』（中央公論社 一九九〇）

三三―三四頁。

(2) 省全體の要の位置を占めるこの空間は、海關行政という側面からは省城大關と澳門總口が管轄する領域、海防という側面からは「廣州中路」に該當し、兩者は互いに補完し

合いながら機能を發揮していた。この空間を一體のものとして把握する研究に以下がある。村尾進「珠江・廣州・澳門——英文および繪畫史料から見た「カントン・システム」」（小野和子編『明末清初の社會と文化』京都大學人文科學研究所 一九九六 所收）・同「懷遠驛」（『中國文化

研究』第一六號 一九九九)。P. A. Van Dyke, *The Canton Trade: Life and Enterprise on the China Coast, 1700-1845*, Hong Kong, 2005. 研究史の紹介としては村尾進「港市社會論(廣州)」「桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店 二〇〇七刊行豫定所収」参照。

- (3) 澳門の中國返還前後から刊行され始めた、澳門・廣東貿易・キリスト教・香山・黃埔をテーマとする以下の諸史料集において、一件の文書がしばしば複数のテーマにわたって収録され、きれいに振り分けることが困難である、という事實そのものが、この五つの問題群がこの空間の中で互いに緊密に結びついていることを如實に表現している。

(1) 『明清澳門問題皇宮珍檔』(華寶齋書社 一九九九) 『皇宮珍檔』と略稱。(2) 『葡萄牙東波塔檔案館藏清代澳門中文檔案彙編』(澳門基金會 一九九九) 『東波塔』と略稱。(3) 『明清時代澳門問題檔案文獻匯編』(人民出版社 一九九九) 『澳門問題』と略稱。(4) 『中葡關係檔案史料匯編』(中國檔案出版社 二〇〇〇)。(5) 『清宮粵港澳商貿檔案全集』(中國書店 二〇〇二) 『粵港澳商貿』と略稱。(6) 『清宮廣州三行檔案精選』(廣東經濟出版社 二〇〇二)。(7) 『清中前期西洋天主教在華活動檔案史料』(中華書局 二〇〇三) 『天主教』と略稱。(8) 『香山明清檔案輯錄』(上海古籍出版社 二〇〇六)。(9) 『明清皇宮黃埔祕檔圖鑑』(暨南大學出版社 二〇〇六)。

- (4) このような本論文の主旨は、第一章から第三章までです。

べて完結している。第四章は半世紀にわたるプロセスの結果として顕在化した、この空間内の差異化と表象について補足的に言及し、以後の検討課題を提起した「おわりに」への布石としたものである。なお、本論文の内容に關わる先行研究として、郭衛東「論一八世紀中葉澳門城市功能的轉型」(『中國史研究』二〇〇一年第二期)がある。

- (5) たとえば廈門については以下を参照せよ。Alexander Hamilton, *A New Account of the East Indies*, London, 1930, Vol. 2, pp. 129-152.

- (6) 矢澤利彦編譯『イエズス會士中國書簡集(一)康熙編』(平凡社 一九七〇)二一〇頁。この編譯書は以下の書の中の中國關係書簡を日本語譯したものである(以後の註において掲げる矢澤氏編譯書もすべて同様)。*Lettres éditantes et curieuses, écrites des Missions Étrangères, Nouvelle édition*, 26vols., Paris, 1780-1783.

- (7) たとえば廣州については以下を参照せよ。Charles Lockyer, *An Account of the Trade in India*, London, 1711, pp. 100-101.

- (8) Van Dyke, *op. cit.*, p. 14.

- (9) 『粵港澳商貿』(一)五一五頁。

- (10) Hamilton, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 125-129.

- (11) Lockyer, *op. cit.*, pp. 113, 141-142. 廣州城内外の描寫は、同書第六章を参照せよ。

- (12) カレリに關する記述は次に據る。Gemelli Careri, *A Voyage round the World*, in A. and J. Churchill eds., A

- Collection of Voyage and Travels*, London, 1744, pp. 273-281, 385-393.
- (13) 廣州におけるアンフィトリト號に關する記述は、特に注記しないかぎり次に據つてゐる。『*A Journal of the First French Embassy to China, 1698-1700*, translated from an unpublished manuscript by Saxe Bannister, London, 1859, pp. 111-153.
- (14) 『イエズス會士中國書簡集(一) 康熙編』一九〇頁。
- (15) 矢澤利彦編譯『イエズス會士中國書簡集(五) 紀行編』(平凡社 一九七四) 三六頁。
- (16) 同上書、二〇～二二頁。
- (17) 同上書、三五～三六頁。
- (18) 同上書、八七頁、『イエズス會士中國書簡集(一) 康熙編』一二五頁。
- (19) Earl H. Pritchard, *Anglo-Chinese Relations during the 17th and 18th Centuries*, New York, 1970, pp. 77-80, 101, 209-210, 223. H. B. Morse, *The Chronicles of the East India Company trading to China 1635-1834*, London, 1926-34, Vol. 1, Table of English Ships which traded to China for the East India Companies, from 1635 to 1753.
- (20) James B. Eames, *The English in China being an Account of the Intercourse and Relations between England and China from the Year 1600 to the Year 1843 and a summary of Later Developments*, London and New York, 1974, pp. 59-60.
- (21) 『天主教』第一冊一一頁。『澳門問題』(一) 七三～七八頁。
- (22) 『康熙朝漢文硃批奏摺彙編』(檔案出版社 一九八四) 第一冊七〇二頁。
- (23) 『澳門問題』(一) 八二頁、『康熙朝漢文硃批奏摺彙編』第一冊七〇二頁。
- (24) 『天主教』第一冊二二頁。『澳門問題』(一) 七三、八二頁。
- (25) 『澳門問題』(二) 七九～八二頁。
- (26) 『澳門問題』(二) 九四、九七頁。
- (27) 陳昂の上奏に關する記述は、特に注記しないかぎり次に據つてゐる。『清實錄』康熙五十六年四月戊戌(一四日)の條、および康熙五十七年二月丁亥(八日)の條。矢澤利彦編譯『イエズス會士中國書簡集(六) 信仰編』(平凡社 一九七四) 一〇一～一四〇頁。
- (28) アン號事件につづいて、以下を参照せよ。Eames, *op. cit.*, p. 59.
- (29) 吳伯姬「禮儀之爭爆發后康熙對傳教士的態度」(『歷史檔案』二〇〇二年第三期)。
- (30) 『イエズス會士中國書簡集(六) 信仰編』一一八頁。
- (31) 『天主教』第一冊三六、四九、五〇頁。
- (32) 『粵港澳商貿』(一) 一四七頁。
- (33) 『澳門問題』(一) 一三四～一三五頁。
- (34) 實際には、滿保の奏摺に先立つ同年二月に、禮科掌印給事中法敏が禁教請願の上奏を行つており(『澳門問題』

- (一) 一三三―一三四頁)、すでに伏線は敷かれていた。宣教師たちも、禁教は雍正帝と満保との間で密かに取り決められていたと判断していた(矢澤利彦編譯『イエズス會士中國書簡集(二)雍正編』平凡社 一九七一 二〇頁)。當時の福建省の禁教の状況は、『イエズス會士中國書簡集(二)雍正編』の第一書簡に詳しい。
- (35) 『天主教』第一冊五六頁。滿保の二度の上奏を援護するかのうちに、中央からも禁教を請願する上奏が行われている(『澳門問題』(一)一三五―一三七頁)。また、『イエズス會士中國書簡集(二)雍正編』の第一書簡には、福建事件以來、雍正帝は讀書人から二〇通以上の反キリスト教嘆願書を受け取っている、とある(四〇頁)。
- (36) 『天主教』第一冊五七頁。なお、禁教令に對する宮中の宣教師たちの抵抗については、『イエズス會士中國書簡集(二)雍正編』の第一書簡を参照せよ。
- (37) 『天主教』第一冊五八―六〇頁。
- (38) フランス東インド會社船がイギリスに追従したこと、およびこの後に來航したフランス東インド會社船のほとんどが廣州に入港していたことについては、以下を参照。
W.E. Cheong, *Hong Merchants of Canton: Chinese Merchants in Sino-Western Trade, 1684-1798*, Richmond, 1997, pp. 28-29. Louis Dermigny, *La Chine et l'Occident: Le Commerce a Canton au XVIII^e siècle 1719-1833*, Paris, 1964, vol. I, p. 153. なお、これよりかなり遅れて一七八年から中國貿易を開始したオステンド(Ostend)會社船、一七二八年から中國との直接貿易を再開したオランダ東インド會社船、それぞれはじめて一七三一年と三二年来航したデンマークとスウェーデンの東インド會社船、およびインドから出航したイギリス・アルメニア・イスラーム・パールシー各商人の地方貿易船も廣州に來航するのを常とした。ただしマニラからのスペイン船は、澳門以外に廈門にも來航し、また米穀を載運したシヤム船は廣州とともに廈門・寧波にも寄港した。
- (39) 『粵港澳商賈』(一)一三二―一三六頁、二四四―二四五頁。
- (40) 『天主教』第一冊六八―七一頁。『粵港澳商賈』(一)四九一―四九二頁。『イエズス會士中國書簡集(二)信仰編』の第一五・一六書簡にも詳細な記述がある。戴進賢はこの時も、通信と貿易の必要性を理由に、二、三人の「西洋人」を廣州に留めることを請願したが、これは許可されなかったと思われる(『粵港澳商賈』(一)四九四―四九六。矢澤利彦編譯『中國の布教と迫害 イエズス會士書簡集』平凡社 一九八〇 五六頁)。
- (41) 『澳門問題』(一)一七四―一七五頁。Beatriz Basto da Silva, *Cronologia da História de Macau Seculos XVIII (Vol. II), Macau, 1997*, pp. 69-73. の問題は黃埔に停泊しているオランダ船がしばしば號砲を放つことを直接のきっかけとしているが、宣教師の澳門への排除と同時期であること、廣州左翼副都統毛克明が黃埔から移動させることを税課の觀點から反對したのに對して、雍正帝が「汝所陳不便、

- 皆稅務錢糧之不便、未念及地方永遠之便與未便也」(『粵港澳商貿』(一)五一五～五二一頁)と硃批を加えている)ことから、そのような些細な事柄が問題となっていたわけではないことがわかる。オランダ船の號砲問題については以下にも記述がある。Paul Hallberg and Christian Koninckx eds., *A Passage to China, Colin Campbell's Diary of the First Swedish East India Company Expedition to Canton, 1732-33*, Göteborg, 1996, p. 105.
- (42) 『皇宮珍檔』第二冊二二一～二二七頁。
- (43) 『粵港澳商貿』(二)七七九～七八四頁。澳門海防同知については、井上裕正「カントン體制とマカオ——アヘン戦争前、清朝による澳門管理を中心に——」(『科学研究成果報告書』『中國歷代王朝の都市管理に關する總合的研究』一九九九 所收)に詳しい。
- (44) 『粵港澳商貿』(二)八六三～八七〇頁。『澳門記略』官守篇。郭廷以『近代中國史』(商務印書館 一九七一)第一冊五一二～五一四頁。
- (45) 『皇宮珍檔』第二冊二二九～二三七頁。『粵港澳商貿』(二)九八二～九九三頁。乾隆九年正月一日附けの廣州將軍策楞等の奏摺(『粵港澳商貿』(二)八九〇～八九五頁)には「海防同知」の語が見えず、四月一日附けの馬爾泰等の奏摺(『粵港澳商貿』(二)八九六～九〇一頁)には「海防同知印光任」とあることから、實際に設立された時期は翌九年春であると思われる。
- (46) 『澳門記略』官守篇。
- (47) 『澳門問題』(一)一三八～二四五頁。『澳門記略』官守篇。
- (48) Anders Ljungstedt, *An Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China and of the Roman Catholic Church and Mission in China*, Boston, 1836, pp. 28-29. この問題をはるる廣東官僚と澳門側の應酬について、以下の一七四六年三月九日・八月七日、一七五〇年の各條にも記事がある。Silva, *op. cit.*, pp. 91, 99.
- (49) 『東波塔』第一三六七番文書(下冊七〇三頁)。同書には、同じ乾隆一九年に、第一三六八番文書(下冊七〇四頁・第一四一五番文書(下冊七三二頁)など、同様の文書が收録されている。
- (50) これは乾隆一六(一七五一)年間五月二日夜に、オランダの「大班」が三人の女性とともに廣州のファクトリーに入った事件の後に定められた規則である。『粵海關志』卷二七・『廣東海防匯覽』卷三七參照。
- (51) 以下にも手續きに關する記述がある。Ljungstedt, *op. cit.*, p. 29.
- (52) ユングステッドによれば、これは一七五七年二月九日のことである。Ibid.
- (53) 『天主教』第一冊七八～八二頁、八四～九〇頁。矢澤利彦編譯『イエズス會士中國書簡集』(三)乾隆編(平凡社一九七二)の第七書簡にも詳しい記述がある。
- (54) 『天主教』第一冊九三頁。
- (55) 『天主教』第一冊一五三頁。『イエズス會士中國書簡集』

(三) 乾隆編』第八書簡にも詳しい記述がある。

- (56) 『天主教』第一冊二一四―二一六頁。
- (57) 『天主教』第一冊二二一―二三三頁。
- (58) 『天主教』第一冊八六頁。『天主教』第一冊二一六―一八頁。また、このメッセンジャーが捕獲された例が以下に見える。『東波塔』第八二八文書(上冊四二五頁)。
- (59) 『天主教』第一冊一五四―一五九頁、一六四―一六八頁、一七一―一七二頁。
- (60) 『澳門問題』(二) 二九五―二九六頁。
- (61) 乾隆帝のこの疑念に關しては、これを否定する兩廣總督楊應琚の報告により、これ以上問題とはならなかった。『粵港澳商貿』(三) 一二三〇―一二三七頁、一二四六―一二四八頁。
- (62) 『粵港澳商貿』(三) 一二八〇―一二八二頁、一二八六―一二八七頁。
- (63) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第一六輯(國立故宮博物院 民國七年) 三九二―三九五頁。
- (64) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第一六輯三九二頁。
- (65) 『粵港澳商貿』(三) 一五九一―一五九三頁。
- (66) 『粵港澳商貿』(三) 一五九六頁。
- (67) 『粵港澳商貿』(三) 一六〇二―一六一三頁、一六二七―一六二八頁。
- (68) 『粵港澳商貿』(三) 一六二九―一六四四頁。
- (69) 『粵港澳商貿』(三) 一六五四―一六五九頁。
- (70) 『粵港澳商貿』(三) 一六五九頁。

- (71) 『粵港澳商貿』(三) 一六六四―一六七五頁。
- (72) 『粵港澳商貿』(三) 一六八〇―一六八五頁。
- (73) 『澳門問題』(一) 三二三―三三八頁、『粵港澳商貿』(四) 一七五五―一七六二頁、一七七三―一七七七頁、一八〇二―一九〇〇頁、一九九〇―一九九二頁。
- (74) 『粵港澳商貿』(三) 二二八一頁、一五九〇頁。
- (75) 『粵港澳商貿』(四) 一九四五―一九四六頁、一九六五―一九六七頁、一九九〇―一九九二頁。『清實錄』乾隆二五年正月辛未(二五日)の條。
- (76) 『粵港澳商貿』(四) 一九九八―二〇一五頁。『清實錄』乾隆二四年二月戊子(二二日)の條。
- (77) 『東波塔』下冊七〇三頁。
- (78) 『東波塔』下冊七〇七頁。
- (79) 『廣東海防匯覽』卷三七。
- (80) Paul Hallberg and Christian Koninckx, *op. cit.*, pp. 162-163.
- (81) Charles F. Noble, *A Voyage to the East Indies, in 1747 and 1748*, London, 1762, pp. 255, 214-215, 248-250, 300.
- (82) Alfred Spencer ed., *Memoirs of William Hickey (1744-1775)*, London, 1913, pp. 225, 229. ただし、郊外行きは許されてゐる、とフェビッキーは書いてゐる。pp. 209-210.
- (83) *Chinese Repository*, Vol. 1, pp. 214-219.
- (84) ただし、乾隆三六(一七七七)年からはらくの間、澳門と宮中の宣教師たちとの中繼役として、廣州に宣教師が

滞在することが許可されたことがある。吳伯姪『康熙乾隆三帝與西學東漸』（宗教文化出版社 二〇〇二）二二二頁。

- (85) 來航船および船員は黃埔に停泊・滯留している。來航民間貿易の全體像については、前掲村尾進「珠江・廣州・澳門——英文および繪畫史料から見た「カントン・システム」」、および P. A. Van Dyke 前掲書を参照せよ。

- (86) 朝貢船および船員は黃埔に停泊・滯留している。廣州におけるシャムの朝貢については、前掲村尾進「懷遠驛」を参照せよ。

- (87) 『天主教』第一冊一〇九頁。

- (88) 『粵港澳商貿』（一）二四一―二四四頁。この時のシャム王の派遣は入貢もしくはそれに準ずるものと見なされている。『海國四說』卷二「暹羅國二」雍正二年の條。

- (89) 『夷氛聞記』（中華書局 一九八五）一四五頁。斷句の誤りは訂正して譯した。

- (90) 原文は次の通り（本文では、「朝鮮一國率先効順」から「宗伯掌之」まで、および「彼世沐皇仁」以下の部分を省略した）。「我朝威德覃敷、遠無弗屆、朝鮮一國率先効順、厥後琉球・越南・日本相繼叩關、咸稱屬國。同奉正朔、久列藩封、方物貢期、胥歸定則、此外則西海窮陬、從古未通之國、靡不向化輸誠、梯賁航琛、來庭恐後、入貢道路、例按海洋遠近、分隸沿邊各省、宗伯掌之、由廣東入貢者、惟暹羅・荷蘭・西洋所屬意大里亞・博爾都噶爾雅以逮暎咭喇諸國、每屆使舟至境、大吏以聞、輒奉餽旨、燕勞有典、伴送有官、厚往薄來、恩施優渥、臣海邦生長、耳濡目染、縷

牒難書、然往籍可徵、即方隅典故、已足覘一統無外之規、聖德懷柔之遠、與前代遣使招致者迥殊、彼世沐皇仁、所爲感激歡欣、當不知如何鼓舞、其有吐蜚尤之霧而煽鯨鯢之波者、使天良未泯、靜念將何以爲心」（『海國四說』「粵道貢國說」卷一「暹羅國一」）。梁廷枏のこの一文がイギリスを念頭においていることは、「其有吐蜚尤之霧而煽鯨鯢之波者、使天良未泯、靜念將何以爲心」とあることから明かである。すなわち、すでに廣州のファクトリーに常駐し、またキリスト教の内地布教（この懸念から著されたのが、『海國四說』中の一編「耶穌教難入中國說」である）とイギリス領事の入城をねらう（『夷氛聞記』の卷五はすべてこのテーマに關する記述である）ことで、朝貢の空間としての廣州を侵犯しようとしているイギリスに、何をわきまえる（廣州が表象する皇帝の「一統無外の規」と「聖德懷柔の遠」）べきかを教えてやるために『粵道貢國說』を著したというのである。

- (91) 「至會靜疊惑於華夷之辨、此蓋因昔之歷代人君不能使中外一統、而自作此疆彼界之見耳、朕讀洪武寶訓、見明太祖時時以防民防邊爲念、其威德不足以撫有蒙古之衆、故兢兢以防邊患、然終明之世、屢受蒙古之侵擾、費數萬萬之生民膏血、中國爲之疲弊、而亡明者即流民李自成也、先有畏懼蒙古之意而不能視爲一家、又何以成中外一統之規、世祖君臨萬邦、聖祖重熙累洽、合蒙古・中國成一統之盛、併東南極邊番夷諸部俱歸版圖、是從古中國之疆宇至今日而開廓、凡屬生民皆當慶幸者、尙何中外華夷之可言哉」（卷

11)。

(92) 讀書人の支持を回復するために、即位前からすでに雍正帝が禁教をプログラムとして持っていたこと、政權の重要課題として、モンゴル（そしてロシア）への對應とベアにして宣教師の廣東への排除が考えられていたことについては、『イエズス會士中國書簡集（二）雍正編』四六―四七頁を参照。また、「回部の平定」と廣州と澳門がつくる邊疆とをベアにして述べるのは、廣東の地方官・士大夫の常套の表現でもあった。たとえば、プリント事件のさなかに編集・刊行が行われた『（乾隆）廣州府志』卷二「廣州府疆域形勢總圖說」中の一文も、西北における「回部の平定」を念頭におきつつ、今後の邊疆の最大の課題として東南の澳門を取り上げている（「今則車書一統、秦越一家、其要害當不在西北而在東南矣、至波浪接天、晶瀾無際、蠓鏡一澳、島嶼孤懸、番夷聚族、海舶連檣、作會城之藩衛、扼要莫重於此」）。

(93) たとえば、この過程にあつて、幕府の指導者はことさらに宗教的な習俗のちがいを強調して、「神敵佛敵」であるとキリスト教を排撃し、「きりしたん國」と「神國」を對比することによって自國のアイデンティティーを自覺していった、といわれる。朝尾直弘「一六世紀後半の日本——統合された社會へ」（『岩波講座 日本通史 第一卷 近世』岩波書店 二〇〇〇 所収）五五頁。

(94) 『雍正硃批諭旨』『李衛』雍正六年八月八日・九月二五日・一〇月一七日の奏摺。『粵港澳商貿』（一）三六―三六七頁。そもそも、一七二〇年代に廣州における東インド會社との取引に特化する以前、福建出身の公行商人たちは主として日本・東南アジア向けのジャンク貿易に携わっていたのであり、その中のある者は寧波を通じた日本銅貿易の獨占商人だったのである。W. E. Cheong, *op.cit.*, pp. 19, 34.

national state hardly permeate down to their level. In addition, *yi* on the margins of territories 竟 (in the borderlands) were the first line of defense and important communication routes, and nevertheless there was a tendency for them to frequently become the vital points of rebellion. From this it can be seen that the methods of controlling distant locations was at that time extremely underdeveloped.

In the fourth section, I examine the military role of the *yi*. Heretofore the military role of the *xian* has been emphasized exclusively, but there was no distinction between the *xian* and the *yi* in terms of advances in military functionality, which was a universal phenomenon at the time. Here, I focus in particular on military mobilization from the *yi*. Although the *yi* that would be the object of military mobilization were geographically limited, it can be considered to have functioned as an efficient means of controlling the *yiren* since it was necessary to forcefully implement military mobilization. Then, military mobilization in this manner became a turning point leading to the amelioration of the instability of *yi* rule and promoting the strengthening of control.

THE TWENTY-FOURTH YEAR OF QIANLONG (1759): THE BORDER FORMED BY GUANGZHOU AND AOMEN (MACAO)

MURAO Susumu

Following the suppression of the Zheng 鄭氏, five ports including Guangzhou and Xiamen 廈門 (Amoy) were opened to civilian trade and maritime customs were established. As a result foreign merchants were able to freely visit the five ports and as long as they were within the port cities, the merchants were able to do as they pleased. Furthermore, since they often transported Catholic missionaries, the missionaries were thereafter freely able to enter and leave the country through the five ports, move about, and settle in various places.

The first signs of a change appeared twenty years after the ports were opened in the 43rd year of the reign of Kangxi (1704). Until that time, the British merchant ships that carried out trade, voyaging along the southeastern coast at Zhoushan 舟山 and Guangzhou, and particularly at Xiamen (Amoy), willingly abandoned Zhoushan and Xiamen, and thereafter it became customary for them to visit only the port of Guangzhou. Subsequently, the decisive exclusion of

missionaries began with the edict of emperor Yongzheng in the 12th month of the first year of his reign (1723), when he ordered missionaries in each province to assemble in either Beijing or Aomen 澳門 (Macao), and because large-scale proselytizing was discovered in Guangzhou, the exclusion of missionaries to Aomen was immediately carried out in the 7th month of the tenth year of his reign (1723). As a result, the missionaries were concentrated in Aomen just as the merchant vessels had previously been concentrated at Guangzhou.

The exclusion of foreign merchants to Aomen in the Qianlong era reached its culmination in the 24th year of Qianlong's reign (1759) with 1) the institution of elaborate controls in regard to Aomen, 2) the exposure of series of cases of proselytizing following the discovery of proselytizing in Fuan 福安縣 county in Fujian, and with the above two as the background 3) Flint's appeal to the throne became a direct impetus to 4) the Five Regulations to control foreigners 防範外夷規條 prohibiting foreign merchants from staying in Guangzhou over the winter and determining their transfer to Aomen. James Flint's sailing into Ningbo was merely a single incident in the process that led to the design of a border space.

Within the territory formed by Guangzhou and Aomen that was ultimately created due to the Five Regulations to control foreigners, a sharp contrast emerged between Aomen, where the missionaries and foreign merchants resided, and Guangzhou as a "space of tribute." This growing contrast was recognized by literati of Guangzhou as an important protective border between China and the outside world, and with the exclusion of missionaries and foreign merchants to Aomen, Guangzhou, where the ritual of tribute alone was carried out, became a space that symbolized the world-wide influence of the Emperor's virtue and the unification of China and the outer world.

THE URBAN SOCIETY OF SYRIA FROM THE VIEWPOINT OF HISTORICAL DEMOGRAPHY: A QUANTITATIVE ANALYSIS OF NUPTIALITY TRENDS IN DAMASCUS

OKAWARA Tomoki

This article attempts a quantitative analysis of nuptiality trends in Damascus, using marriage license (*izinnama*) registers as a historical source. There was a clear contrast in nuptiality trends in periods of crisis and in normal times in